岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第191集

# 川井館跡発掘調査報告書

## 国道281号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

# 川井館跡発掘調査報告書

国道281号改良工事関連遺跡発掘調査

# 序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達に課せられた責務であると思います。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策となっております。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として多方面から期待されるところであります。

このような保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、県教委文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本報告書は、県北部にある山形村内を通る国道281号改良工事に関連し、平成３年度発掘調査した川井館跡の調査結果について収録したものであります。調査の結果、館に伴う堀跡、平場、曲輪が発見され当地方における中世城館の構造を知る上での貴重な資料を得ることができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました岩手県土木部久慈土木事務所、山形村教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成４年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　工　藤　　巌

# 例　言

1．本報告書は、岩手県九戸郡山形村川井第10地割字後口表63ほかに所在する川井館跡の調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、一般国道281号改良工事に伴い岩手県教育委員会と岩手県土木部久慈土木事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。

　遺跡番号…ＬＦ57-0229　遺跡略号…ＫＤ91

4．調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。

　平成３年５月10日～11月21日、6,360㎡、高橋義介・花坂政博

5．室内整理期間と整理担当者（執筆者）は、以下のとおりである。

　平成３年11月25日～平成４年３月31日、高橋義介・花坂政博

6．分析・鑑定は、次の方々に依頼した。（敬称略）

　石質鑑定……佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）

　鉄滓分析……赤沼英男（岩手県立博物館）

　火山灰分析……三辻利一（奈良教育大学）

7．土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』を参考にした。

8．本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示をいただいた。（敬称略）

　川向石造（山形村総務課長）、及川　洵（大船渡市立博物館）、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、千葉啓蔵（久慈市教育委員会）、桐生正一（滝沢村教育委員会）

9．本報告書に掲載した実測図の凡例については、Ⅲ．調査経過と調査方法等によった。

10．野外調査にあたっては、山形村川井・戸呂町地区と二戸市石切所地区の方々にご協力をいただいた。

11．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

# 〈目　次〉

序

例言

## 〈本　文〉

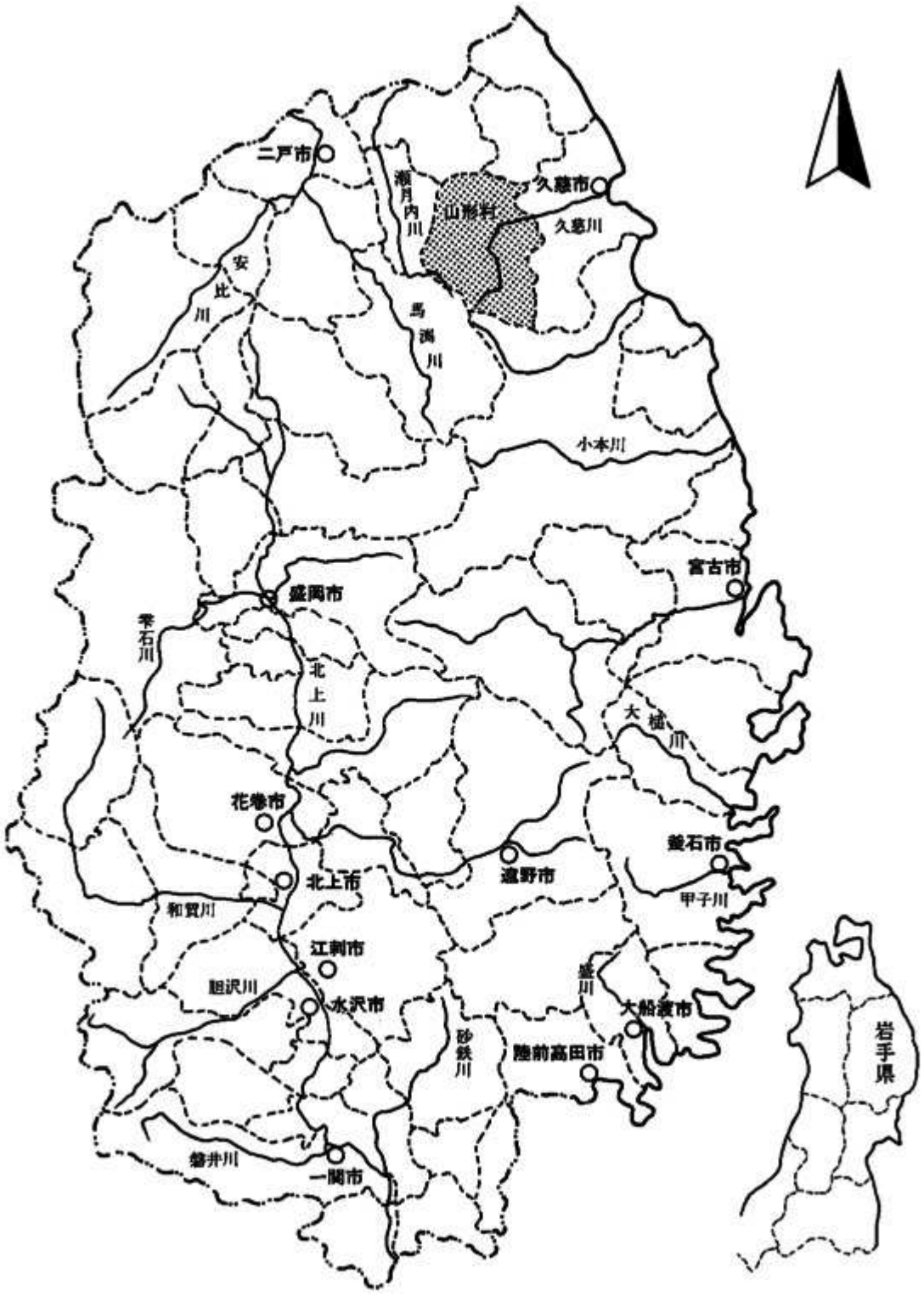
Ⅰ．調査に至る経過…… 2
Ⅱ．遺跡の立地と環境…… 2
　1．遺跡の位置…… 2
　2．地形と地質…… 5
　3．基本層序…… 5
　4．周辺の遺跡…… 7
Ⅲ．調査経過と調査方法……10
　1．調査の経過……10
　2．調査の方法と室内整理の方法……10
Ⅳ．調査の結果……11
　1．検出された遺構と遺物……11
　　(1)　館跡の概要……11
　　(2)　二郭……14
　　(3)　堀跡……17
　　(4)　柱穴状土坑……19
　　(5)　焼土遺構……20
　2．遺構外出土遺物……20
　3．まとめ……23
付編1　川井館跡出土火山灰の蛍光X線分析……25
付編2　川井館跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析……27

## 〈図　版〉

第1図　岩手県図における遺跡の位置…… 1
第2図　遺跡位置図…… 3
第3図　地形分類図…… 4
第4図　基本土層図…… 6
第5図　周辺の遺跡位置図…… 9
第6図　川井館跡全域図 …… 12
第7図　遺構配置図 …… 13
第8図　二郭平場出土遺物 …… 14
第9図　二郭平場東西・南北断面図 …… 15
第10図　1・2号堀跡断面図 …… 16
第11図　柱穴状土坑分布図 …… 18
第12図　焼土遺構 …… 20
第13図　遺構外出土遺物(1) …… 21
第14図　遺構外出土遺物(2) …… 22

## 〈写真図版〉

写真図版1　調査区遠景……37
写真図版2　調査区遠景……38
写真図版3　空中写真……39
写真図版4　空中写真……40
写真図版5　土層断面……41
写真図版6　堀跡断面……42
写真図版7　堀跡断面……43
写真図版8　堀跡完掘……44
写真図版9　二郭完掘・主郭近景……45
写真図版10　出土遺物……46




第１図　岩手県図における遺跡の位置

# Ⅰ．調査に至る経過

国道281号は、岩手町沼宮内から北上山系を横断し、久慈市に至る延長約81kmの幹線道路である。かつての『塩の道』で、久慈街道と呼ばれていた内陸と沿岸部を結ぶ重要な道路である。国道改良は、交通安全の確保を図るため昭和62年度に事業化され、昭和63年度に工事着手したものであるが、この事業に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、管理を委託されている久慈土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議された。協議の経過については以下のとおりである。

平成元年９月５日付け「教文第415号」で平成２年度発掘調査事業の照会が県教育委員会から久慈土木事務所に対してなされ、平成元年９月29日付け「土総号外」で久慈土木事務所は事業の回答を岩手県教育委員会に対して行った。

平成２年11月15日付け「教文第709号」で試掘調査の結果が久慈土木事務所に報告され、平成３年２月７日付け「教文第899号」で、6,360㎡の調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成３年度委託事業とすることとした。

久慈土木事務所と岩手県文化振興事業団との委託契約は平成３年４月１日であり、同年５月11日に発掘調査に着手したものである。

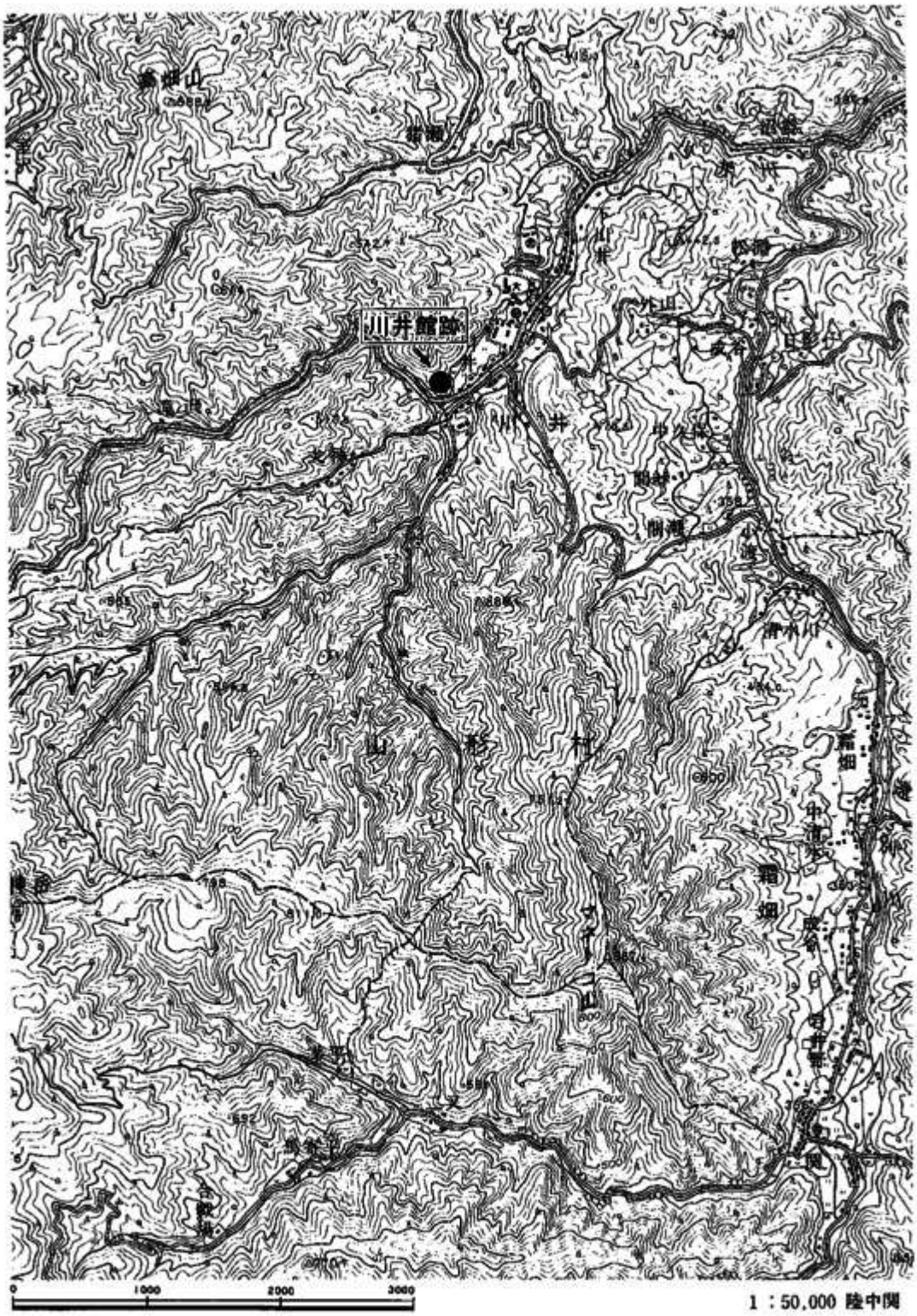
# Ⅱ．遺跡の立地と環境

## １．遺跡の位置

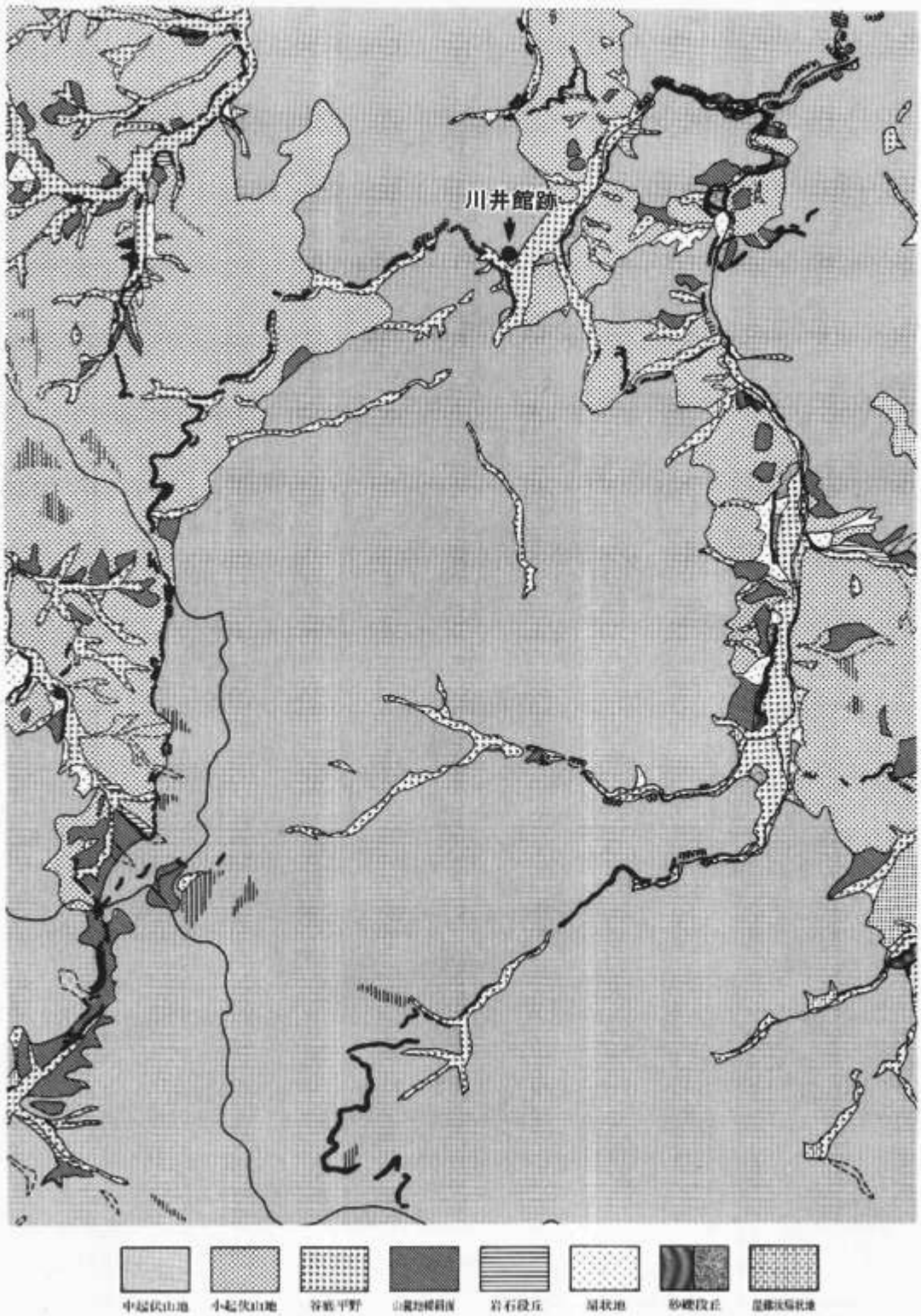
川井館跡は岩手県九戸郡山形村川井に所在し、山形村役場の西南西約950mの国道281号の北側に位置している。第１・２図に示すように遺跡の所在する山形村は、岩手県の東北部、北上山地の北部やや東寄りに位置し、東は久慈市、西は九戸村、南は葛巻町・岩泉町、北は軽米町・大野村の６市町村に隣接している。

村の総面積は295.61㎢と広大であるが、その94％が山林原野でその谷間に遺跡の所在する川井地区をはじめとし、８つの集落が点在している。歴史的にみると、南境の平庭峠から合戦場、馬寄平に下る道は江戸時代久慈や野田に至る街道で、沿岸と内陸を結ぶ塩と鉄の道として重要な位置にあった。

国土地理院発行の５万分の１地形図「陸中関」（ＮＫ-54-18-8）の図幅に含まれ、北緯40度８分20秒、東経141度33分17秒付近にあたる。




第2図　遺跡位置図




**第 3 図　地形分類図**

## 2．地形と地質

遺跡の所在する山形村（第３図）は、東に寒長根山（720.80m）、南西部に平庭岳（1,059.80m）・明神岳（887.00m）・遠別岳（1,168.80m）、東南部に遠島山（1,262.70m）、マネドコ山（867.40m）等、北上山地北部の高峰が村の南西部から南東部にかけて広がっている。また、西部の九戸村との境に接する地域から北部の大野村、東部の久慈市にかけては、北上山地の古い隆起準平原の現地形が残存する起伏量の小さい山地が広がっている。これら山地の峡谷に源を発する川井川、遠別川、そして村の北部を流れる戸呂町川、日野沢川などの大小の河川に沿って谷底平野が点在しているが、山間部のため細長く分布し連続性に乏しい。その中で南部から西部にかけて大きく広がる明神岳山地の東側と西側の縁辺には、周囲を小起伏山地に囲まれた谷底平野が比較的広く発達している。これら谷底平野に接して、両側の山地より流出した土砂礫によって所々に小扇状地に形成されている。

本遺跡は、川井川の左岸に立地しており、周囲の現況は山林と牧草地、標高は327～336m、谷底平野との比高は44mほどである。

地質は古生層が大部分を占め、他に中生層・第四紀層・花崗岩類等が分布する。古生層は北上山地北部型と呼ばれる砂岩、粘板岩、チャート、輝緑灰岩、石灰岩等から構成されている。また、土壌は淡色黒ボク、黒ボク、褐色森林、乾性褐色森林等の土壌で占められている。

**<参考・引用文献>**

岩手県（1972）：『北上山系開発地域土地分類基本調査　陸中関』

経済企画庁総合開発局（1974）：『土地分類図付属資料　岩手県』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）：『管波Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文報告書139集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）：『葉の木沢遺跡発掘調査報告書』　岩埋文報告書154集

金野静一　他（1990）：『岩手県の地名』　平凡社

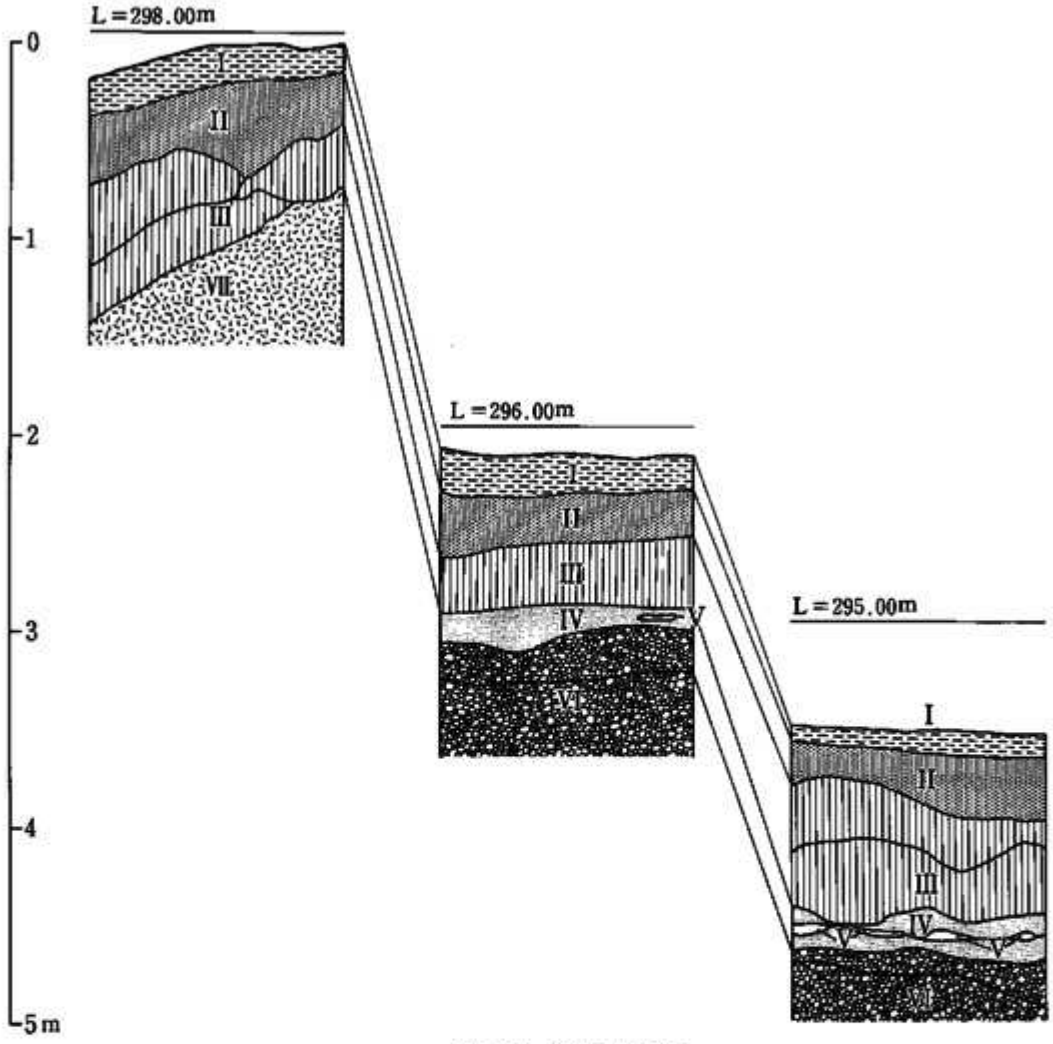
## 3．基本層序

館跡二郭の平場は、牧草地として利用されており表土下層も薄くすぐに基盤のⅦ層が露出をしている。第４図は調査区西側（CⅧ区）で観察された土層断面図である。Ⅳ層中からは斜面崩落の土石流痕跡が確認されている。

**Ⅰ層**　黒褐色土（10ＹＲ2/2～3/3）　表土及び耕作土で、層厚は10～40cmの範囲である。二郭の平場での厚さは10cm前後と比較的薄い。

**Ⅱ層**　暗褐色土（10ＹＲ3/3）　やや堅く締まったシルト質土で、径１～２cmの角礫を含み、層厚は30～70cm前後である。傾斜地では厚く堆積をしている。

**Ⅲ層**　黒褐色土（10ＹＲ2/2～3/2）　斜面崩落土で、３層に細分される。径10～50cm前後の




第４図　基本土層図

角礫を多く混在し、層厚は30～40cm程である。

**IV層**　黒褐色土(10ＹＲ2/2～2/3)　シルト質土で粘性が著しい。２層に大別され、径１～２cm大の角礫と炭を微量に含み、層厚は10～25cmである。

**Ｖ層**　灰黄褐色土（10ＹＲ5/2）　十和田ａ降下火山灰で、一部の地点で見られ不連続に堆積をしている。層厚は２～最大４cmで、堅く締まっている。

**VI層**　黒色～褐色土（10ＹＲ1.7/1～4/4）　砂礫層で、径10cm大の角礫を多く含む。一部に水酸化鉄斑の帯状の堆積が見られる。層厚は確認していない。

**VII層**　黄褐色土（10ＹＲ5/6～5/8）　粘土質土の基盤層で、堅く締まっている。層厚は確認していない。二郭の平場における遺構検出面である。

## 4．周辺の遺跡

これまで山形村で行われた本格的な発掘調査は、早坂平、高屋敷の両遺跡での調査例があるだけである。しかし、平成元年度から3年間にわたって実施された村内全域の遺跡分布調査などで、村内の埋蔵文化財の実態が次第に明らかになってきている。

第5図の遺跡分布を概観すると、そのほとんどは村内を流れる主要な河川に沿って発達する谷底平野やそれに隣接する山地の緩斜面上に集中しており、縄文時代の遺跡に関してはその傾向が顕著である一方、製鉄関連遺跡の一部は山地に存在している。また、中世の城館跡は丘陵地に存在している遺跡が多いものの、その周囲は平野部に面している。分布の状況を地域的にみると、川井・繋の両地区では、河川沿いにいくつかの遺跡が近隣にまとまって存在する傾向があるのに対して、戸呂町・日野沢地区では河川沿いに広く分布しているという特徴が見られる。

本格的に調査された2つの遺跡のうち、後期旧石器時代の遺跡である早坂平遺跡からは、黒色頁岩製の石刃石核、珪質岩製の彫器と同種の石刃、黒色頁岩製の中～大型木葉形尖頭器、その他剥片等が出土している。調査報告書によると遺跡は原産地遺跡として位置付けられているが、環境の変化とそれに対応する住居形態、石器製作のシステムの変化があったことも推測できるとしている。

もう一方の高屋敷遺跡は縄文時代、奈良・平安時代の集落で、縄文時代の住居跡31棟、奈良・平安時代の住居跡26棟をはじめ、土壙、配石遺構、柱穴状ピット等が検出されている。遺物は縄文土器、土師器、石器、鉄器類、琥珀等多様で、縄文・奈良・平安期の生活を解明する上での大きな手がかりとなる資料が出土している。

村内の状況を通観すると、旧石器時代に属すると思われる遺跡は今のところ早坂平のほかに3カ所存在すると見られる。

縄文～平安時代の遺跡は、村内各地に縄文中心に多く存在するものと見られているが、集落跡が検出されたのは前述の高屋敷遺跡のみであり今後のさらなる調査が期待される。

中世関連遺跡としては、現在のところ10余カ所の城館跡が確認されているが、関館など館の有無を含めてその所在が不明というものもいくつかある。規模はいずれも小規模で、戸呂町中輪館、荷軽部館、日野沢館等には狭隘な平場とともに堀跡と見られる遺構も残存している。また、近世から近代にかけての製鉄関連遺跡も数多く存在している。

今後村内全域の分布調査が終了し、さらに調査事例が増えることにより遺跡の数や性格の実態も明らかになるものと思われる。

**<参考・引用文献>**

築部善二郎（1971）：『二戸郡・九戸郡古城館址考』

岩手県教育委員会（1986）：『岩手県城館跡分布調査報告書』

岩手県山形村教育委員会（1989）：『山形村遺跡分布調査報告書１』山形村埋蔵文化財調査報告書１

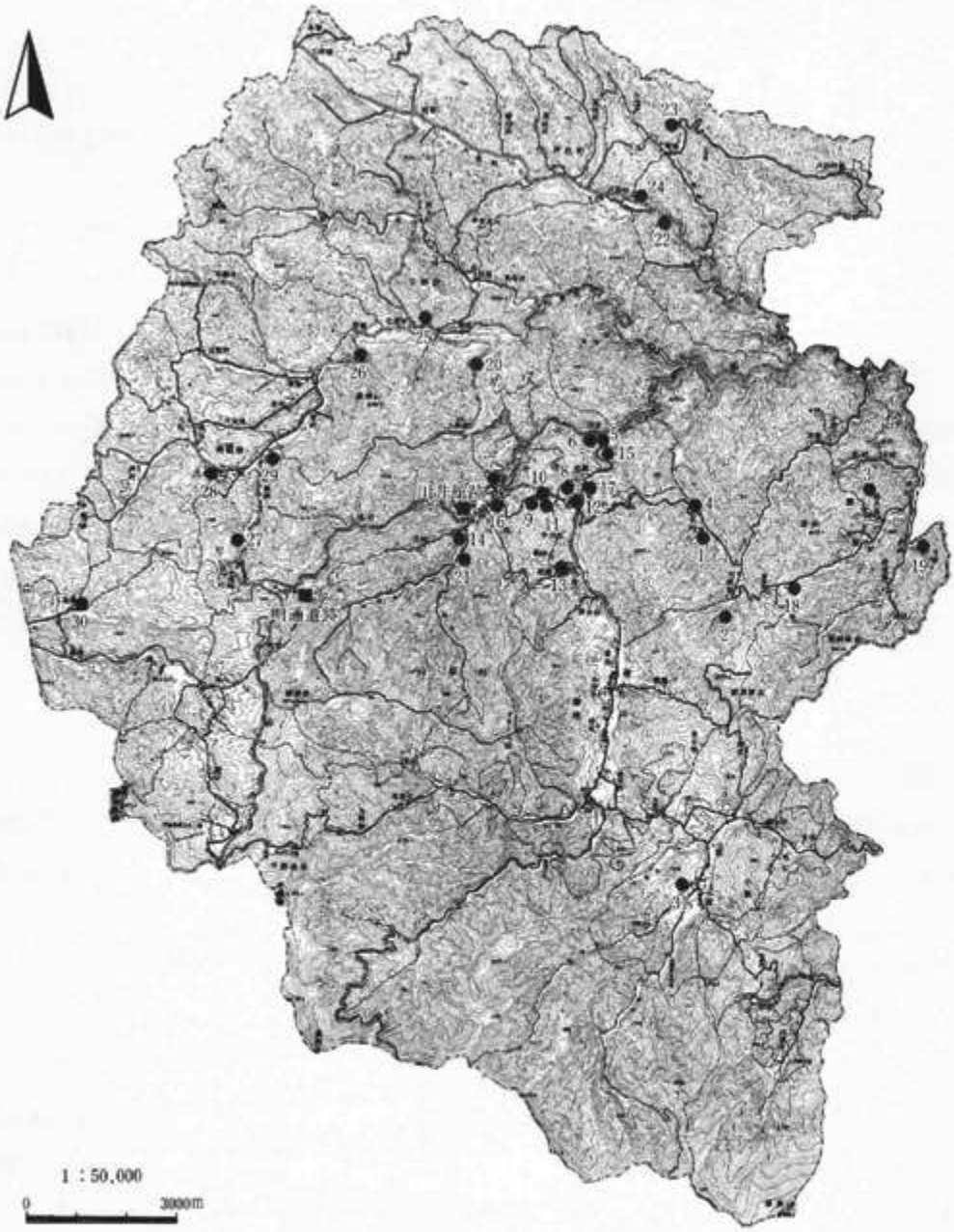
岩手県山形村教育委員会（1991）：『早坂平遺跡』山形村埋蔵文化財調査報告書２

岩手県山形村教育委員会（1991）：『山形村遺跡分布調査報告書２』山形村埋蔵文化財調査報告書３

## 第１表　周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 遺構・遺物 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 繁大矢内 | 散布地 | 弥生土器 | 18 | 繁鉄山 | 製鉄跡 | 排滓場、炉壁、ふいご羽口、大鍛冶滓、他 |
| 2 | 木沢畑鉄山 | 散布地・製鉄跡 | 縄文土器(後期)、焼土、木炭層、鉄滓、他 | 19 | 目屋 | 散布地 | 縄文土器、弥生土器 |
| 3 | 大戸の境久保 | 散布地 | 尖頭器（旧石器） | 20 | 搭瀬鉄山 | 製鉄跡 | 押立柱跡、高殿、ふいご羽口、排滓場 |
| 4 | 大谷内 | 散布地 | 縄文土器（後期）、土師器 | 21 | 川井鉄山 | 製鉄跡 | 鉄滓、炉壁 |
| 5 | 早坂平 | 散布地 | 尖頭器、石核(旧石器)、縄文土器(前期) | 22 | 戸呂町中館 | 館跡 | 平場、空堀 |
| 6 | 沼袋 | 散布地 | 縄文土器、土師器 | 23 | 尾無館 | 館跡 | 館としての遺構は不明 |
| 7 | 日吉畑Ⅰ | 散布地 | 貯蔵穴、縄文土器、独鈷石 | 24 | 戸呂町外館 | 館跡 | 平場 |
| 8 | 御久保Ⅰ | 散布地 | 縄文土器、土師器、陶器片、石器 | 25 | 日野沢館 | 館跡 | 井戸跡、空堀 |
| 9 | 外山Ⅰ | 散布地 | 石器剥片 | 26 | 野場館 | 館跡 | 館としての遺構は不明 |
| 10 | 外山Ⅱ | 散布地 | 縄文土器（後期） | 27 | 大峰平 | 散布地 | 縄文土器、石器、土師器 |
| 11 | 外山Ⅴ | 散布地・製鉄跡 | 縄文土器、土師器、鉄滓、陶磁器片 | 28 | 円館 | 館跡 | 空堀 |
| 12 | 皮谷 | 散布地 | 石刃（旧石器）、縄文土器、土師器 | 29 | 荷軽部館 | 館跡 | 空堀、展望、土塁 |
| 13 | 岡瀬 | 散布地 | 縄文土器 | 30 | 安堵城 | 館跡 | 未確認 |
| 14 | 川井 | 散布地 | 縄文土器（前期・晩期） | 31 | 判官館 | 館跡 | 平場、空堀、郭 |
| 15 | 大平 | 散布地 | 剥片（旧石器） | 32 | 皮谷館 | 館跡 | 空堀、郭 |
| 16 | 高屋敷 | 集落跡 | 竪穴住居跡（縄文後期・平安） | 33 | 岡館 | 館跡 | 未確認 |
| 17 | 川井成谷館 | 館跡 | 平場、空堀（中世） | | | | |

※32・33については遺跡の所在地に関する資料がなく第５図中には掲載していない。




**第5図　周辺の遺跡位置図**

# Ⅲ. 調査経過と調査方法

## 1．調査の経過

平成３年５月10日（金）明通遺跡から発掘器材を搬入する。５月13日（月）調査事務所設営後に雑物除去と刈払作業を開始する。刈払作業は５月18日（土）まで延べ５日間行う。５月20日（月）調査区北東側の県教委文化課が行った試掘トレンチの盛土除去作業を開始する。５月21日（火）調査区内の立木伐採が行われる。５月29日（水）伐採木の枝葉除去作業を開始し、延べ３日間行う。６月１日（土）調査区東側の試掘を開始する。６月14日（金）粗掘を開始する。６月15日（土）ヘリコプターによる館跡の空撮を行う。６月17日（月）地形測量基準点の設置作業を開始する。７月19日（金）深掘りの断面実測を行う。７月22日（月）粗掘と並行して遺構検出作業を開始する。８月20日（火）遺構の実測を粗掘・検出作業と並行して開始する。８月26日（月）排土搬出用のベルトコンベヤーを８台搬入する。９月25日（水）遺構の精査を開始する。11月１日（金）県教委文化課の調査終了確認を受ける。11月16日（土）一部埋め戻し作業を開始する。11月20日（水）久慈土木事務所と調査区の埋め戻し等の立会を行う。11月21日（木）発掘器材を搬出して現地を撤収する。

## 2．調査の方法と整理の方法

(1)調査区の設定　調査区の区画設定に関しては、任意の基準点１～３を設置した。各基準点の平面直角座標第Ｘ系による成果は次のとおりである。基軸線は基準点２と３から平面直角座

基準点１　Ｘ＝＋15,926.296m、Ｙ＝＋62,461.941m、Ｈ＝336.050m

基準点２　Ｘ＝＋16,026.139m、Ｙ＝＋62,441.660m、Ｈ＝327.290m

基準点３　Ｘ＝＋15,998.913m、Ｙ＝＋62,363.653m、Ｈ＝334.160m

標のＰ点（Ｘ＝＋16,020m、Ｙ＝＋62,430m）上にのるように設定した。Ｐ点を原点にして30ｍ×30mの大区画を設定し、さらに３ｍ×３ｍの小区画に細分した。小区画は東西に数字の１～10、南北にアルファベットのａ～ｊを付した。調査区の名称及び配列については第７図のとおりである。

(2)粗掘・精査　雑物の除去と刈払い作業から開始し、試掘トレンチ、粗掘、遺構検出の順に進めた。表土及び堀の排土搬出にはベルトコンベヤーを８台使用して行った。

(3)実測・写真撮影　実測は簡易遣り方測量を設定して行ったが、一部平板測量も併用した。遺構実測図は20分の１を基本としている。写真撮影は６×７cm判１台（モノクロ）と35mm判２台（モノクロ・リバーサル）を使用して行った。６×７cm判については省略した遺構もある。

(4)室内整理　現場で残った遺物の注記から開始し、遺物ごとの仕分け、接合復元、遺物の実

測、拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版作成の順に作業を進めた。また、これらの作業と並行して遺物の計測、諸鑑定、原稿の執筆を行い報告書に掲載した。

(5)図面　遺構図面の縮尺は焼土20分の１、土坑40分の１、平場・郭・堀跡にはそれぞれスケールを付した。遺物図面の縮尺は、石器・鉄滓２分の１、土器３分の１を原則としているが、器種の大きさに応じては一部縮尺を変えてある。図版中の焼土、調査区域外は次のようなスクリントーンを使用している。また、石はＳ、土器はＰ、柱穴・小穴は$P_1$・$P_2$…で図示した。

焼　土　　調査区域外

# Ⅳ．調査の結果

## １．検出された遺構と遺物

検出された遺構は、中世城館に伴う平場（二郭）・曲輪・堀跡２条、焼土３基、柱穴状土坑52基である。遺物は縄文時代の土器・石器（剥片・礫石器）、弥生時代の土器、平安時代の土師器、鉄滓、ふいごの羽口、古銭、陶磁器等が出土している。破片が大部分を占め量も僅かである。

(1)館跡の概要（第６図、写真図版１～４）

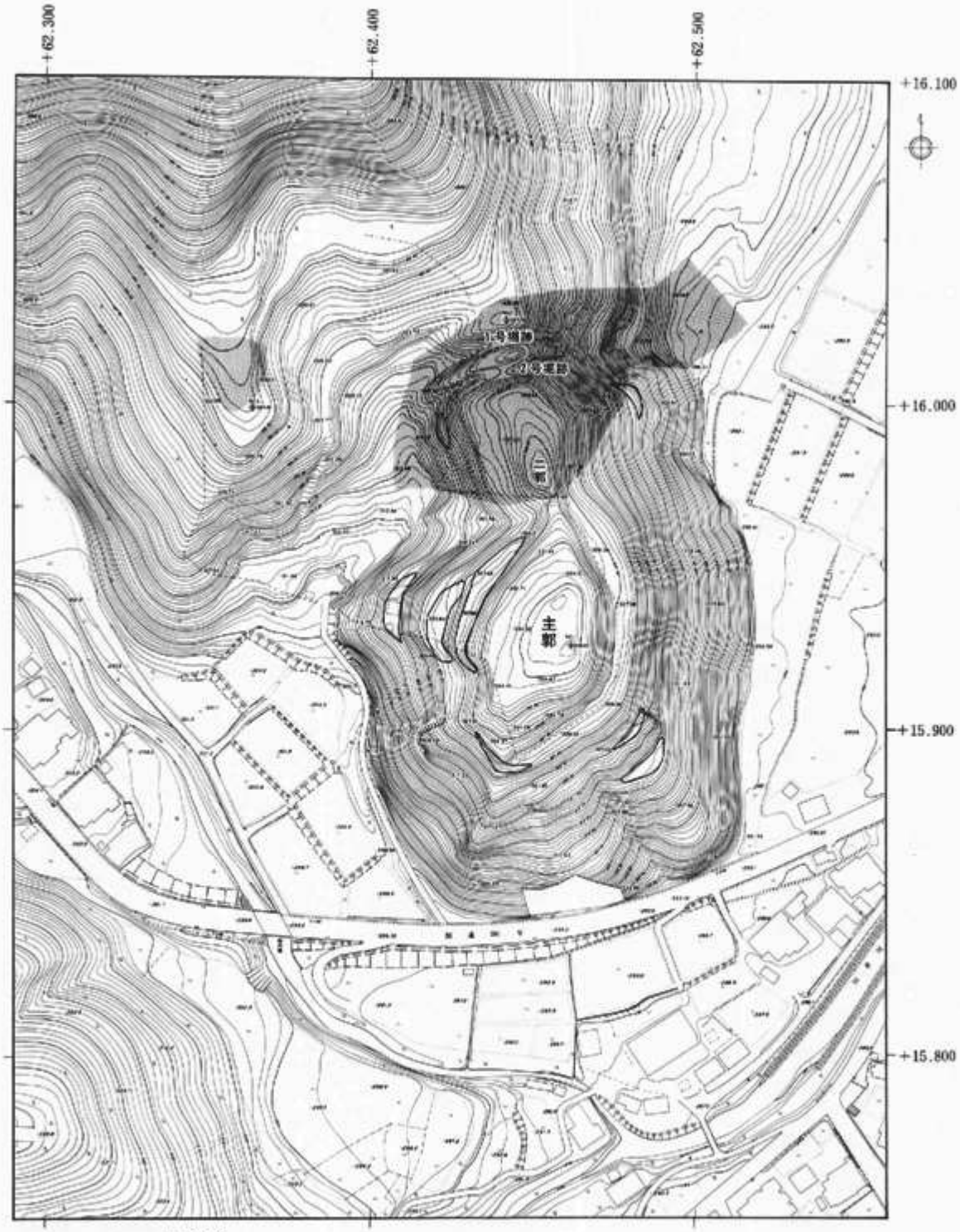
川井館は、第６図に示すように二つの郭（主郭・二郭）からなる連郭式山城である。国道281号の北側に位置し、川井川左岸に連なる山稜から南側に張り出した舌状部に立地している。主要部の標高は327～336mで、東側に広がる谷底平野との比高は44m程である。

周囲の概観は、東・西・南側の三方が急峻な崖で、北側は後方の山に続いている。主郭と二郭は空堀で区切って区画され、山側と二郭の間には二重に空堀（１・２号堀）を巡らし堅固にしている。曲輪は大小合わせて８ケ所に構築されている。

舌状部中央付近に位置する主郭は、北々東―南々西方向に長い不整楕円形状を呈しており、規模は56×35m、面積は1,350㎡である。頂部の平場からは四方を眺望できる。

主郭の曲輪は西側に３ケ所、南東側に２ケ所、南西側に１ケ所配置されている。西曲輪は三段に構築され、規模は上段が43×７m・面積170㎡、中段が25×６m・面積107.5㎡、下段が22×5.4m・面積57.5㎡である。南西曲輪の規模は20×３m・面積33㎡である。南東曲輪は二段に構築され、規模は上段が11×2.6m・面積22.5㎡、下段が11×2.6m・面積57.5㎡である。形状はいずれも外側に弧状に張り出している。

主郭と二郭を区切る堀は、埋没しているために詳細は不明であるが上幅６～８mで東西方向に延び、西側に至って１・２号堀と合流すると思われる。



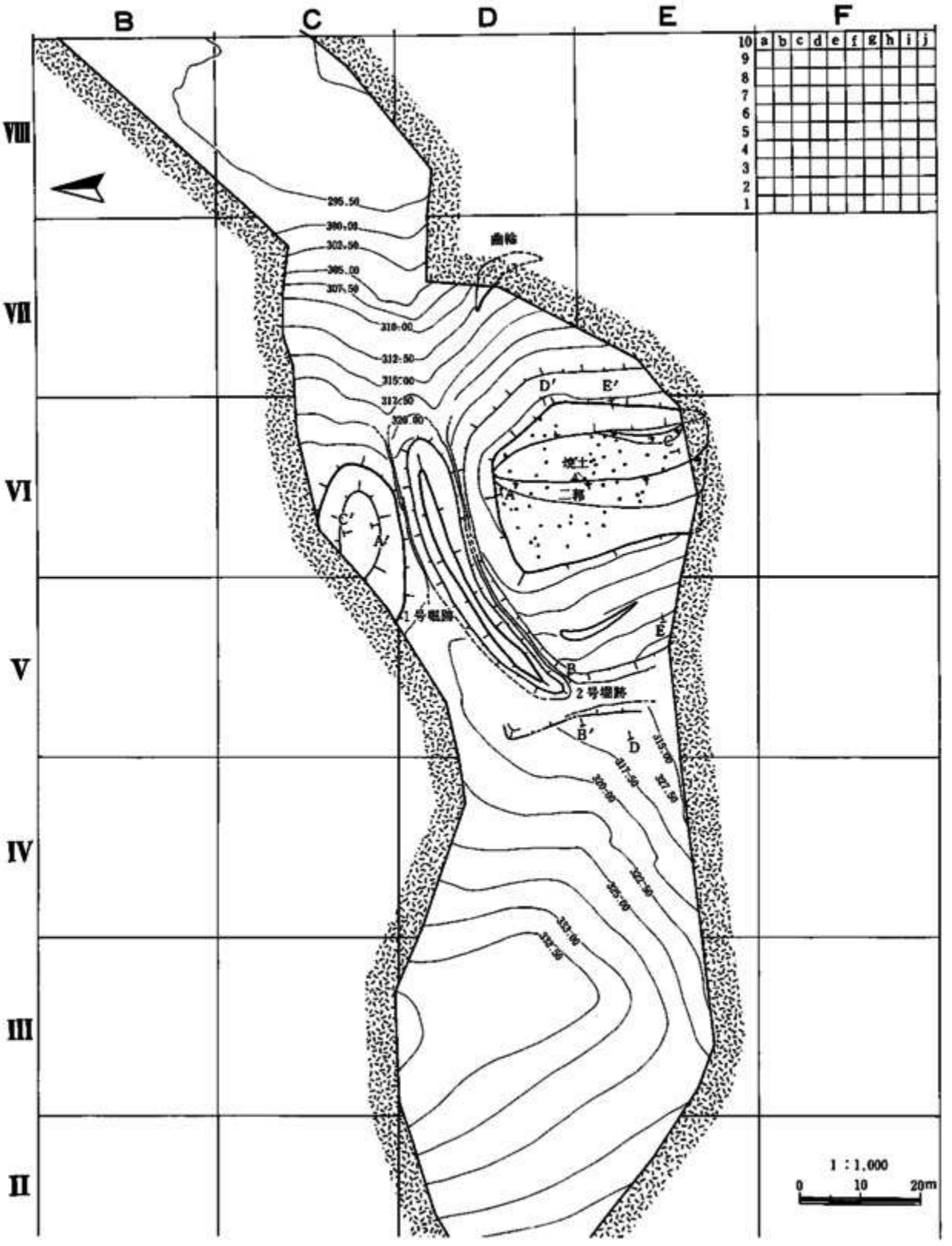

1：2,000

0　50m

アミの範囲は調査区

| 測点 | X座標 | Y座標 | 標　高 |
|---|---|---|---|
| No.1 | +15,926.295 | +62,461.941 | 336.05m |
| No.2 | +16,026.139 | +62,441.660 | 327.29m |
| No.3 | +15,988.913 | +62,363.653 | 334.16m |

**第6図　川井館跡全域図**


B
C
D
E
F
VIII
VII
VI
V
IV
III
II
10 a b c d e f g h i j
9
8
7
6
5
4
3
2
1
295.50
300.00
302.50
305.00
307.50
310.00
312.50
315.00
317.50
320.00
曲輪
D′
E′
C
境土
二郭
A
C′
A′
1号堀跡
E
B
2号堀跡
B′
D
315.00
317.50
320.00
322.50
325.00
327.50
330.00
332.50
1：1,000
0
10
20m

第7図　遺構配置図

⑵二郭（第６～８図、写真図版９・10）

二郭は主郭北側の山寄りに位置している。周囲の概観は第６図に示すように東西両側が急峻な崖を呈し、空堀が南側に１条と北側に２条（１・２号堀）巡っている。曲輪は小規模であるが東西斜面の２ケ所に配置をしている。平場のほぼ全域が調査区（第７図）に該当している。

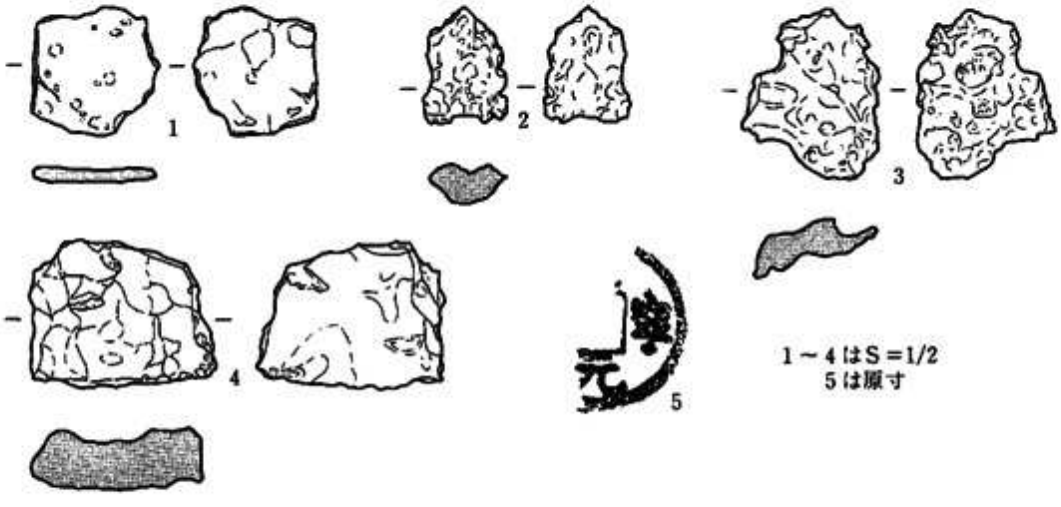
二郭平場の平面形は南北方向に長軸を有する不整５角形状を呈しており、規模は南北35×東西25m、面積は約780㎡である。中央から東寄りの幅８ｍ前後、長さ30mの範囲が平坦部を構成しており、他は緩斜面となっている。最頂部は空堀寄りの南東側にあり、主郭平場との比高は５ｍ程で、基盤の礫層が露出をしている。平場からは館跡に関連する掘立柱建物跡や柵列は検出されなかった。

曲輪の規模は、東曲輪が14×3.4m・面積43㎡、西曲輪が14×1.4m・面積20㎡である。形状は半円状に外側に張り出している。いずれも遺構は検出していない。

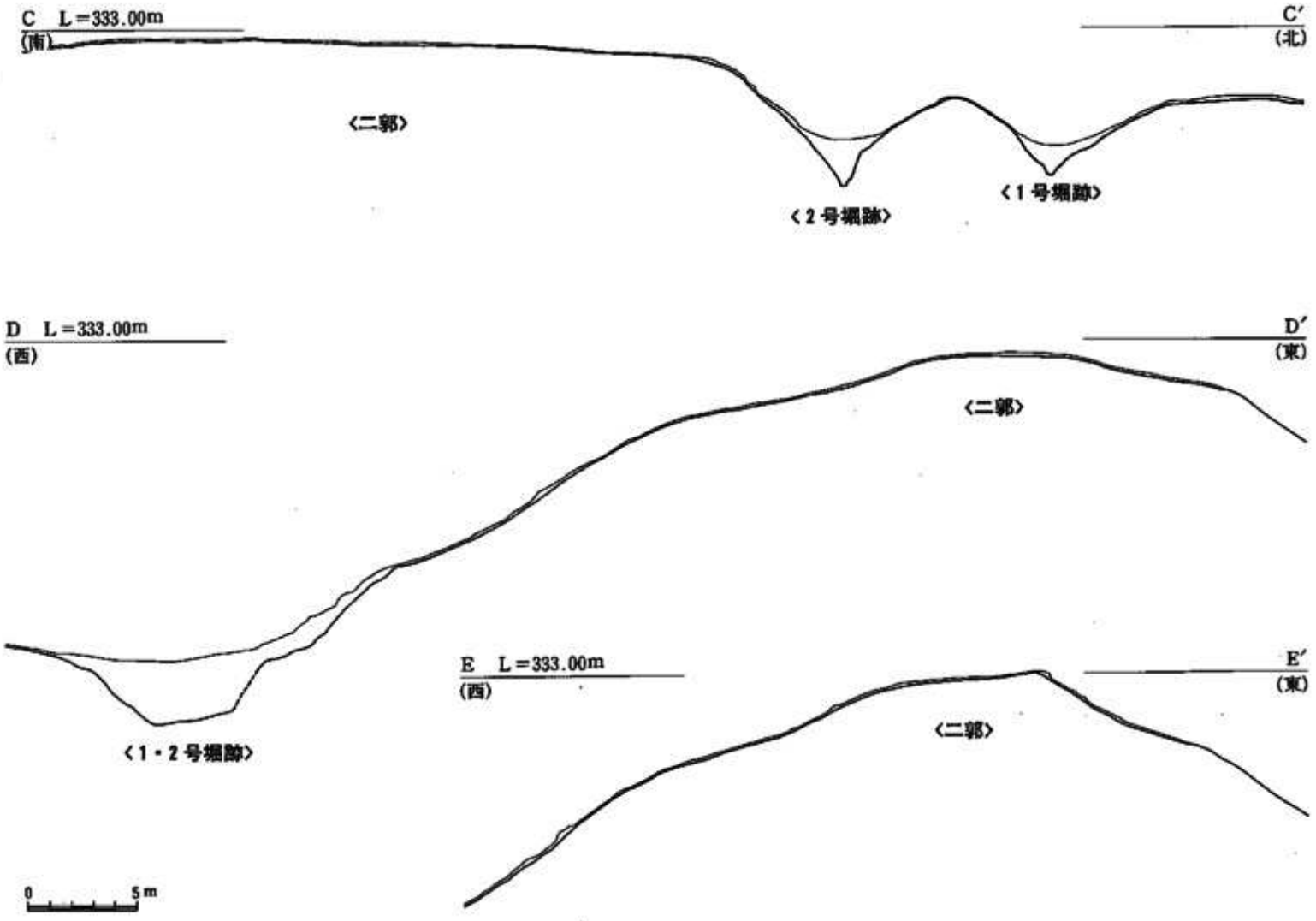
遺物（第８図）は平場から鉄製品、鉄滓、古銭等が５点出土したのみである。１と４は器種および用途が不明の鉄製品である。１は両端部を欠損しており、長さ3.2×３cm・厚さ0.3cm・重さ9.2ｇである。付編２の金属学的解析（資料No.１）の結果、鍛造鉄器であることが判明している。４は台形状を呈しており、長さ4.3×3.5cm・厚さ1.2cm・重さ46.7ｇである。

２と３は鉄滓破片である。２は５角形状をしており、長さ2.9×2.1cm・厚さ１cmである。３は不整形状で長さ4.3×3.5cm・厚さ0.5cmである。鉄滓２の金属的解析結果（資料No.２）は、付編２に収録されているのでそちらを参照されたい。

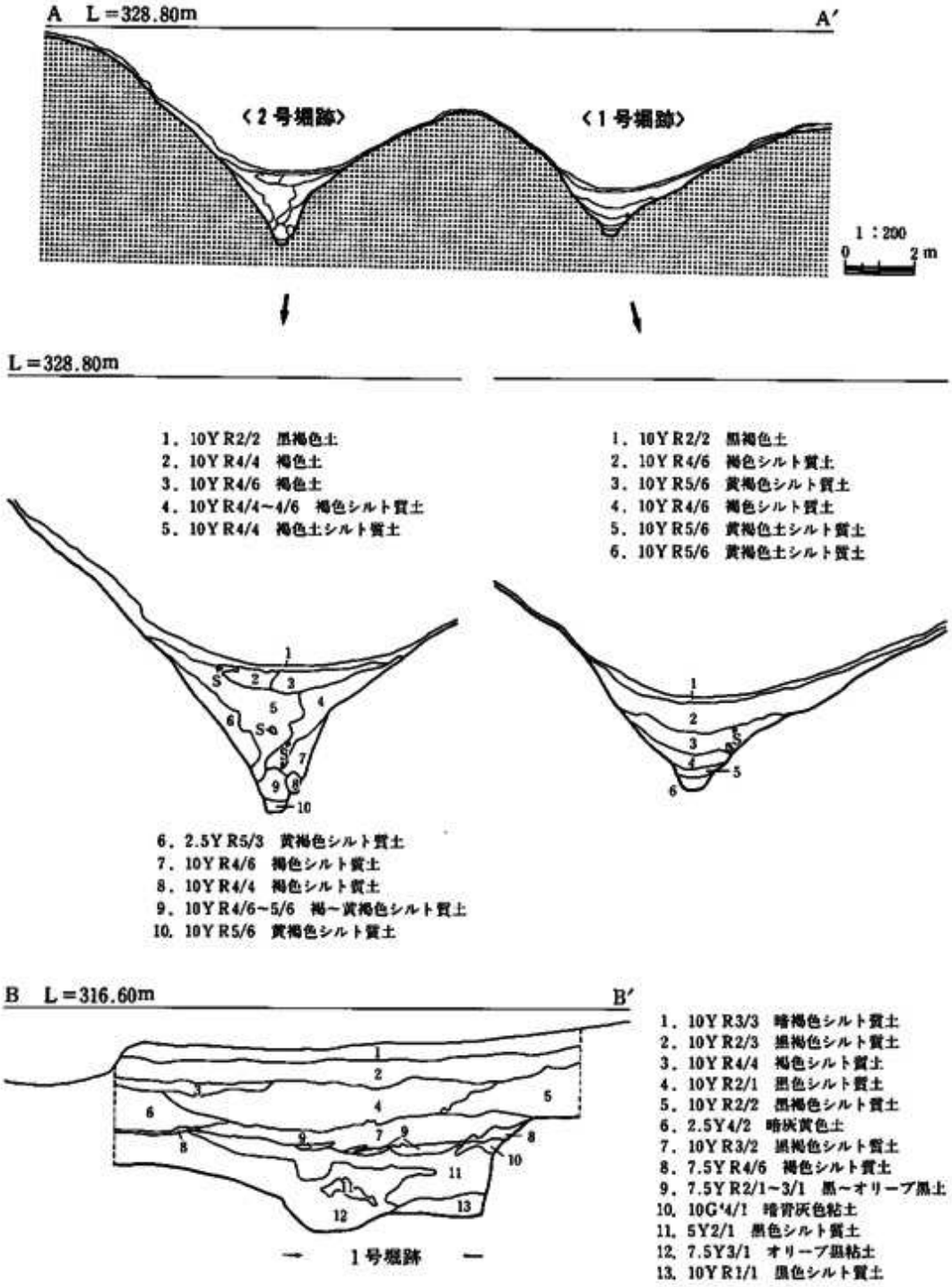
５は半分欠損しているが中国宋朝銭の熙寧元寶（初鋳造年1068年）である。




第８図　二郭平場出土遺物




第9図 二郭東西・南北断面図




第10図　1・2号堀跡断面図

(3)堀跡（第６・７・９・10図、写真図版６～８）

堀は主郭と二郭の間に１条、二郭北側の山寄りに２条確認されている。第７図に示すように調査区は、二郭寄りの一部だけ該当することから堀全体の規模・形状等の詳細が不明である。今回調査した１・２号堀は、山稜から張り出した舌状地形の北側を東西方向に二重に堀切りして二郭と区切っている。東側は急勾配で斜面に落ち、二郭の西側に至って１・２号堀が合流し主郭の西側を巡って南西側の沢に続いている。

１号堀の南西斜面側には長さ30m程の旧斜面崩落ケ所があり、調査途中において地滑りが発生した事からＤＶ区における堀の底面までの掘り下げは全域行わず一部に止め、写真撮影・図面実測後に埋め戻しを行った。

１号堀は諸薬研堀で、下幅の規模が20～30cmと人一人が通れる程の狭さで、上幅は４～５ｍ前後を測る。土塁との比高はＡ～Ａ′ライン上で3.5m程である。

２号堀も１号堀と同様に諸薬研堀である。規模は上幅が５～８ｍ、下幅が25～50cmで西側に巡るにしたがって幅は広くなるようである。Ａ～Ａ′ライン上で土塁との比高は3.8m、二郭北側との比高は６ｍ前後を測る。

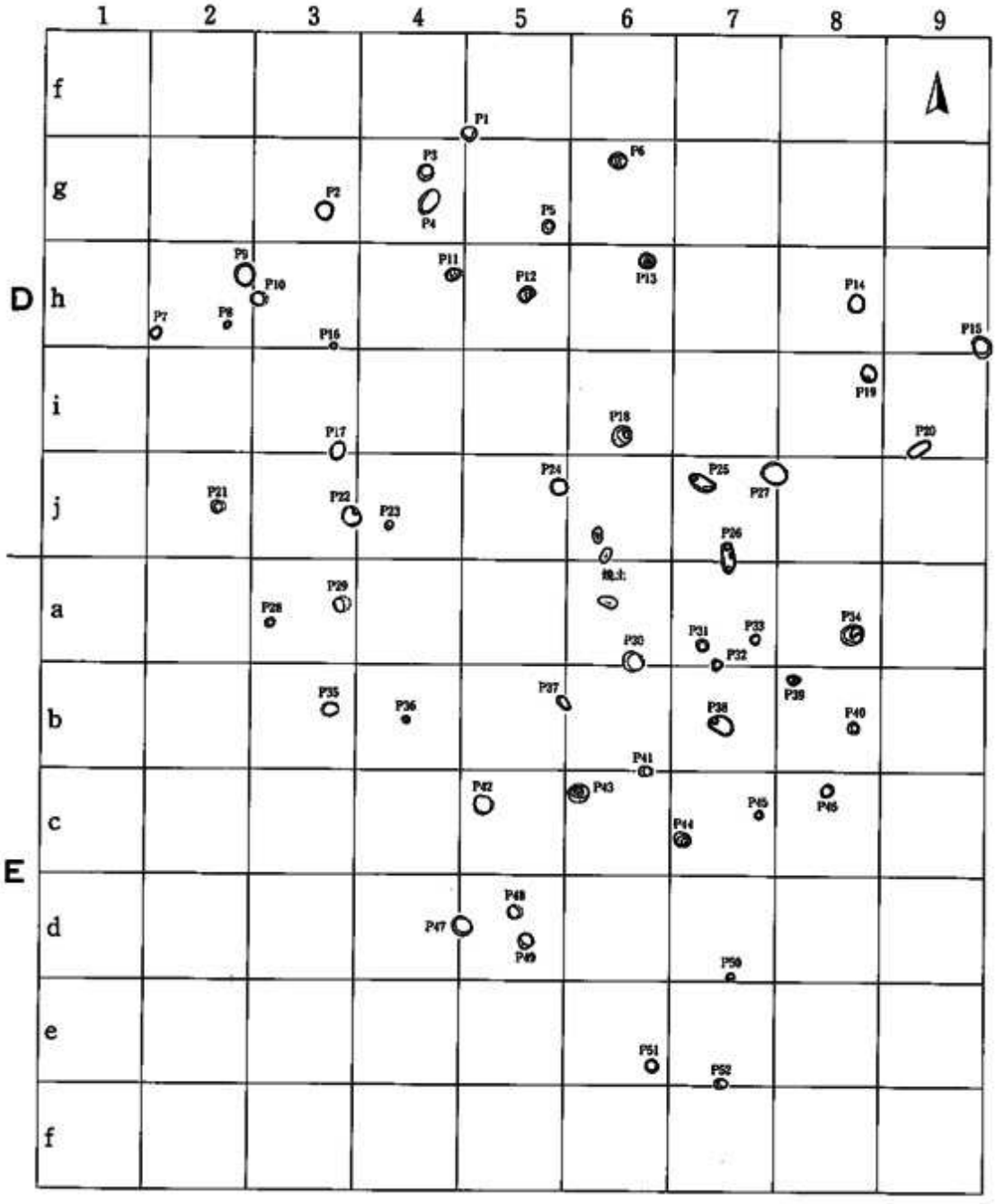
１・２号堀の合流点付近での上幅の規模は６～８ｍ前後、下幅がＢ～Ｂ′ライン上で2.8～3.4ｍを測る。合流してからは箱堀となると思われる。

第10図は１・２号堀の断面図である。１号堀の埋土Ａ～Ａ′は、褐色と黄褐色シルト質土を主体とする６層に大別される。上位の２・３層は堅く締まり、炭と炭化物を微量に含んでいる。下位は斜面崩落土の黄褐色と褐色シルト質土が互層で堆積している。

Ｂ～Ｂ′は二郭西側の２号堀との合流地点付近の埋土である。上位は暗褐色と黒褐色シルト質土で、中位は斜面崩落土の黒色と黒褐色シルト質土で、下位は黒色シルト質土とオリーブ黒粘土で構成され13層に大別される。上位から中位にかけては斜面崩落土の径２～５cm大の石を多く含み、下位は水酸化鉄がブロック状に堆積し、11・12層は特にグライ化が著しい。

２号堀の埋土Ａ～Ａ′は、褐色シルト質土を主体とする10層に大別される。上位から中位は炭化物と炭化材を含有する褐色土で、下位は斜面崩落土の褐色～黄褐色シルト質の互層で構成されている。埋土中位の５層には炭と炭化材が比較的多く含まれている。

１・２号堀との間は鞍部状を呈しており、規模は長さ50m、上辺は1.2～２ｍ、底辺は９ｍ前後を測る。上部には盛土されていたと思われるが、大部分は崩落や流出し遺存していない。２号堀の南西側埋土には崩落土の堆積が多く見られる。




第11図　柱穴状土坑分布図(二郭)

(4)柱穴状土坑（第11図）

二郭の平場と緩斜面上から52基検出している。平面形状は方形３基、円形15基、楕円形34基で、楕円形を呈するものが半数以上の65％を占めている。規模は長軸径で20～40cm大が過半数で、最小は径19cm、最大は86cmである。深さは２～74cmの範疇にあり、平均は35.8cmである。掘り方を有するものは数基だけであり、埋土はやや堅く締まったシルト質の暗褐色土や黄褐色土の単層で構成されている。

遺構の分布状況からは、建物跡や柵列等になる様な規則的な配置は認められなかった。出土遺物もなく時期は不明である。

第２表　柱穴状土坑一覧表

| 柱穴No. | 規模cm | 深さcm | 平面形状 | 柱穴No. | 規模cm | 深さcm | 平面形状 | 柱穴No. | 規模cm | 深さcm | 平面形状 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 42×40 | 28 | 方形 | 19 | 48×41 | 30 | 楕円形 | 37 | 47×26 | 12 | 楕円形 |
| 2 | 55×50 | 18 | 円形 | 20 | 72×33 | 13 | 楕円形 | 38 | 72×47 | 24 | 楕円形 |
| 3 | 48×42 | 42 | 楕円形 | 21 | 34×32 | 67 | 円形 | 39 | 34×28 | 29 | 楕円形 |
| 4 | 80×48 | 31 | 楕円形 | 22 | 53×43 | 51 | 楕円形 | 40 | 32×31 | 28 | 円形 |
| 5 | 38×33 | 37 | 円形 | 23 | 26×20 | 32 | 楕円形 | 41 | 31×28 | 28 | 楕円形 |
| 6 | 54×45 | 56 | 楕円形 | 24 | 45×44 | 30 | 円形 | 42 | 53×50 | 56 | 円形 |
| 7 | 38×32 | 64 | 楕円形 | 25 | 72×37 | 19 | 楕円形 | 43 | 60×50 | 49 | 楕円形 |
| 8 | 24×18 | 74 | 楕円形 | 26 | 86×37 | 13 | 楕円形 | 44 | 48×45 | 55 | 円形 |
| 9 | 64×58 | 65 | 円形 | 27 | 70×58 | 11 | 楕円形 | 45 | 25×24 | 18 | 円形 |
| 10 | 40×38 | 2 | 円形 | 28 | 22×22 | 39 | 円形 | 46 | 39×32 | 18 | 楕円形 |
| 11 | 40×35 | 34 | 楕円形 | 29 | 38×28 | 54 | 楕円形 | 47 | 57×48 | 35 | 楕円形 |
| 12 | 49×36 | 61 | 楕円形 | 30 | 58×52 | 64 | 楕円形 | 48 | 32×32 | 65 | 円形 |
| 13 | 45×45 | 31 | 円形 | 31 | 36×32 | 26 | 楕円形 | 49 | 42×36 | 55 | 楕円形 |
| 14 | 51×43 | 16 | 楕円形 | 32 | 25×25 | 17 | 方形 | 50 | 30×18 | 10 | 楕円形 |
| 15 | 61×50 | 20 | 楕円形 | 33 | 30×27 | 20 | 方形 | 51 | 38×35 | 44 | 円形 |
| 16 | 19×17 | 32 | 円形 | 34 | 66×55 | 33 | 楕円形 | 52 | 37×26 | 23 | 楕円形 |
| 17 | 47×40 | 45 | 楕円形 | 35 | 38×36 | 63 | 楕円形 | | | | |
| 18 | 59×54 | 37 | 楕円形 | 36 | 22×18 | 35 | 楕円形 | | | | |

(5)焼土遺構（第12図）

1号焼土

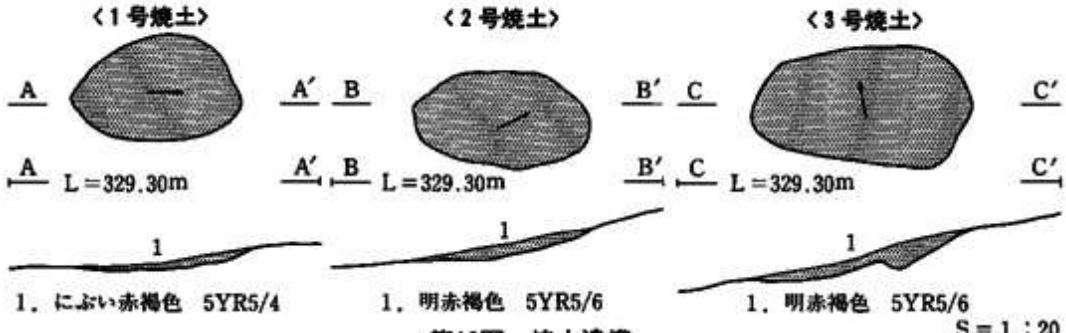
二郭の中央部北寄りDⅥ区に位置し、南東側26cmに2号焼土が隣接している。焼土は表土層下位から検出され、43×28cmの楕円形気味に広がり、強く焼成を受け赤褐色を呈している。厚さは最大で3cmである。現地性のもので、時期を決定する遺物は出土していない。

2号焼土

DⅥ区の緩斜面上に位置し、北西側26cmに1号焼土が隣接している。焼土は46×25cmの楕円形状に広がり、厚さは3cm前後を測る。現地性のもので、遺物は出土していない。

3号焼土

二郭の中央部北寄りのEⅥ区の緩斜面上に位置し、北側1mに2号焼土が隣接している。焼土は57×30cmのやや不整楕円形状を呈し、明赤褐色に焼成を受け厚さは3～7cmを測る。1・2号焼土と同様に現地性のもので、時期を決定する遺物は出土していない。




第12図　焼土遺構

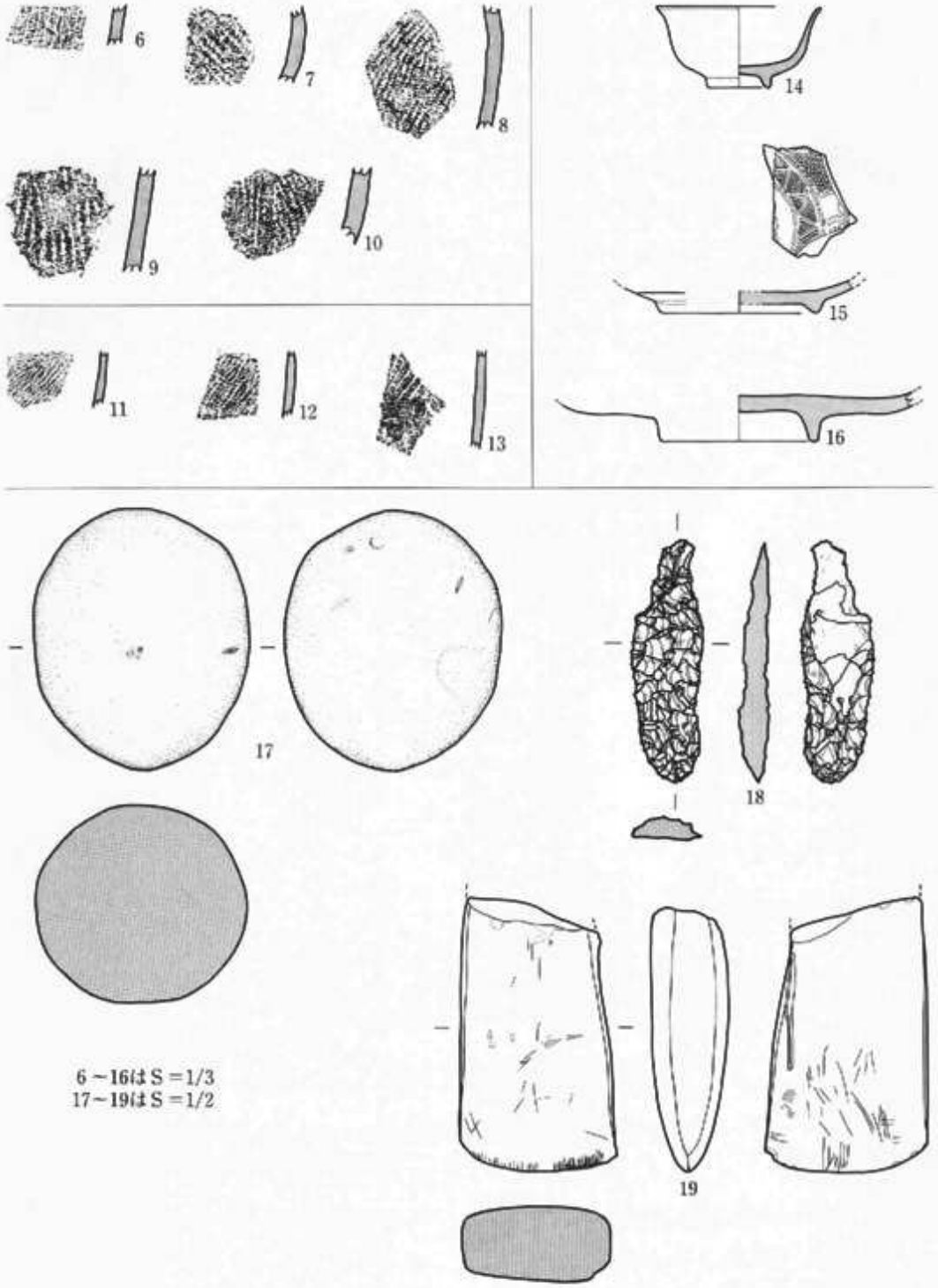
## 2．遺構外出土遺物

遺構外からは縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、剥片石器、礫石器、鉄滓、ふいごの羽口等の遺物が僅かに出土している。破片が大部分を占めており、図面を掲載したのは次の21点（第13・14図、写真図版10）である。

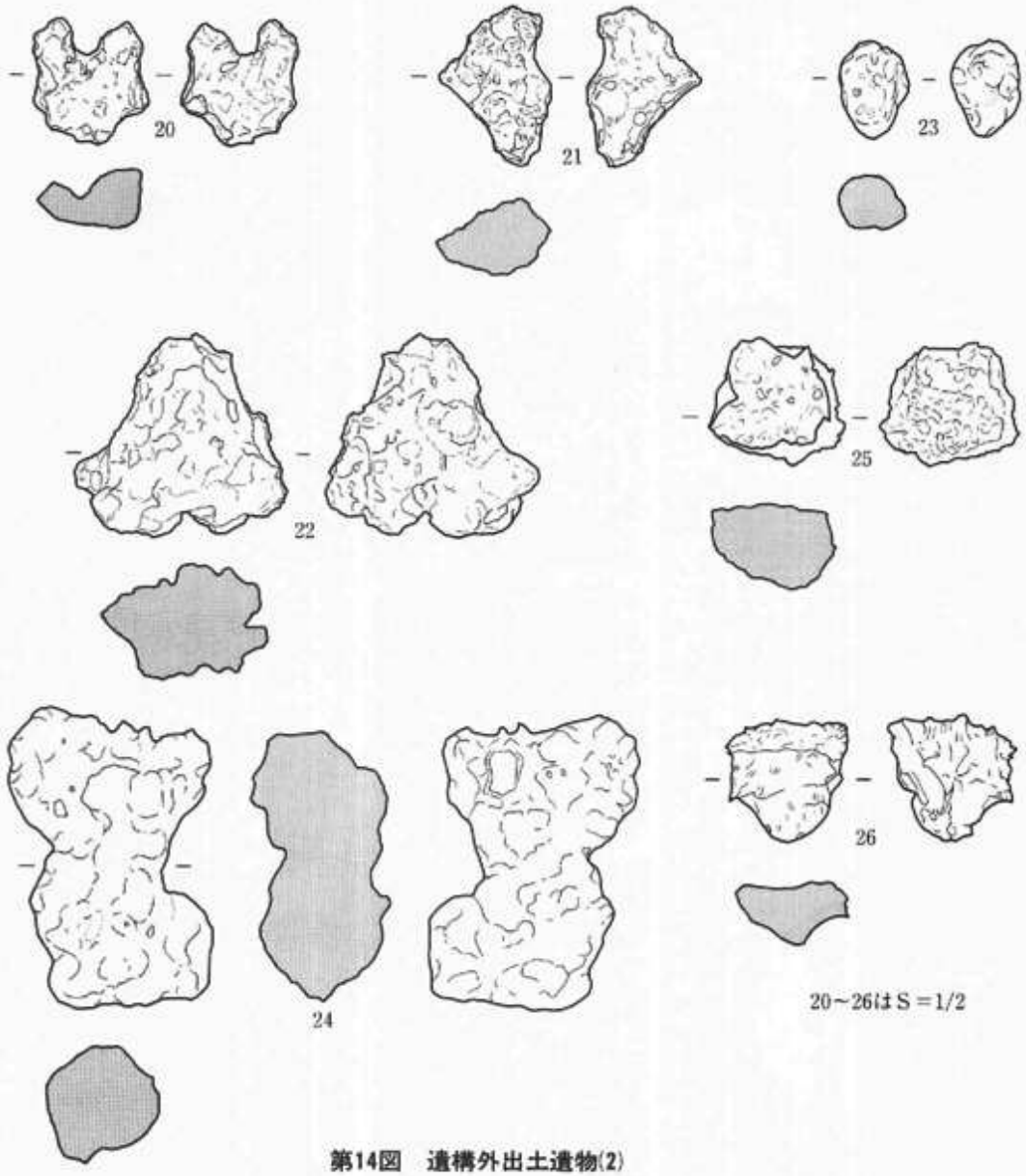
6～10は縄文土器破片である。器形はいずれも鉢型土器と思われるもので、6は撚糸文、7～10は単節斜縄文を施している。時期は不明である。

11～13は弥生土器破片で、地文に撚糸文を施しており胎土は緻密に締まっている。県内の岩泉町赤穴洞穴出土の赤穴式土器に類似するもので、時期は弥生時代末葉に比定される。

14・15は磁器で、14は小型の茶碗、15の皿の破片である。いずれも近世以降の新しい時期の




第13図　遺構外出土遺物(1)




**第14図　遺構外出土遺物(2)**

物である。16は銅釉陶器の皿破片で、内面に見込剥ぎが見られる。唐津焼きと思われる皿で、時期は17世紀頃に比定される。

17は楕円形状の自然石を転用した磨石で、両面の一部が使用されている。長さは7.5×6.3cm・厚さ5.7cmを測る。石質は花崗閃緑岩（北上山地）である。

18は縦型石匙で、刃部は両側から丁寧に調整加工を施している。長さは7×2.1cm・厚さが9mmである。石質は凝灰岩質チャート（北上山地）である。

19は基部の一部を欠損した擦切石斧である。刃部は蛤刃を呈し、刃縁はやや丸みを有してい

る。側縁には切り込み溝痕が一部残っており、側面の研磨はやや荒く行われている。長さは8×4.7cm・厚さ2.4cmを測る。石質は凝灰質粘板岩（北上山地）である。

20～24は鉄滓で、形状は不整形状を呈している。22と24は比較的大きな破片で、22の長さは5.6×5.2cm・厚さ2.9cm・重さ80g、24の長さは8×5.4・厚さ3cm・重さ180gである。金属学的解析は20（資料No.2）、21（資料No.3）、22（資料No.5）の3点を行っており、詳細は付編2に収録されている。25・26はふいごの羽口と思われる破片である。

図化しなかった中には平安時代の土師器の甕がある。やや短少の口縁部は頸部から外反するように立ち上がり、口唇部は丸味を呈している。口縁部はヨコナデ、体部外面は強くヘラナデ調整が施され、胎土に径2～4mm大の粗砂の混入が多く見られる。破片で点数は僅かである。

## 3．まとめ

川井館全城の概要に補足を若干加えてまとめとする。館跡は北側の山稜から川井川に向かって延びた舌状地形に立地をしており、川井地区の遠望が非常に良好である。谷底平野との比高は44m、標高は主郭上部で336mと比較的高く、地域の各所から位置の確認が容易である。

規模は主郭が56×35m・面積1,350㎡、二郭が35×25m・面積780㎡で、平面形は不整楕円形状と不整5角形状を呈している。二郭の長軸は舌状地形と同様に南北方向に有している。二郭で館に関連する掘立柱建物跡や柵列等の遺構は検出されていない。

次に館の縄張りを見ることにする。(1)主郭の曲輪配備は西側に三段と南東側に二段に複数が設置されていることから南東側から西側に重点を置いたものであろう。二郭の場合は東側と西側に配されているが、規模は主郭に比べて小規模である。

(2)堀の穿つ場所は、主郭と二郭の間と山側と二郭の間である。北側の堀は二郭と山地を分断するように東西方向に二重に堀切りし堅固にしてある。1・2号堀の掘り方は諸薬研堀で、二郭の西側で合流してからは下幅の規模も広くなり箱堀となる。前者は未発掘のため詳細は不明であるが、西側で1・2号堀と合流すると思われる。

(3)土塁は主郭と二郭で確認ができなかった。1・2号堀の法側には崩落土の黄褐色シルト質土の堆積が見られる事から、堀の間の鞍部上部は盛土が施されていたとも十分に推察できる。

(4)出入口である虎口は調査区内で確認されなかった。堀を利用していたとも考えられるが、斜面を上がるにしたがって狭くなる事から無理である。主郭の概観から見て南側の曲輪と曲輪の間の南々西側沢筋の斜面を使用したと思われる。

山形村内における城館は、岩手県中世城館跡分布調査報告書には13ケ所掲載されているものの所在地不明を除くと10ケ所である。遺跡の所在する川井地区を中心しとて、北側の戸呂町地区に①尾無館・②戸呂町外輪館・③戸呂町中輪館、北東側の日野沢地区に④日野沢館・⑤野場

館、西側の荷軽部地区に⑥円館・⑦荷軽部館、南東側の霜畑地区に⑧成谷館、南東側の小国地区に⑨判官館が散在している。各地域における城館の調査は行われていないことから不明な点が多い。旧久慈街道すじの集落には少なくとも１ケ所の城館が設置されていた事が遺跡分布図から読み取れる。

天正20(1592)年６月の「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」の文献には、10郡内の12城を残し36城を秀吉の諸城破却令により破却したとしている。当地方の糠部郡之内では、久慈城（久慈修理)、野田城（一戸掃部助)、葛巻城（工藤掃部助)、一戸城（石井信助)、古軽米城（小軽米左衛門佐）等が見られるものの、山形村内における城館名の記載はされていない。川井館も他の館と同様に文献による城館主や沿革等は不明である。

遺物は二郭の平場から出土の中国宋朝銭の熙寧元寶や17世紀頃の唐津焼きの銅釉陶器の皿破片が中世～近世の時期に該当するものであるが全体の遺物量は僅かであり、縄文土器・石器、弥生土器、平安時代の土師器、鉄滓等と混在している。二郭から出土した遺物等から中世城館としての位置付けができよう。

また、館は狭隘な平場の立地条件から見張りを主としたとの説も十分に考えられる。今後当地方における城館の調査例が増える事により、県北地方の内陸部に分布する蝦夷館との関連性を考える上での資料となろう。

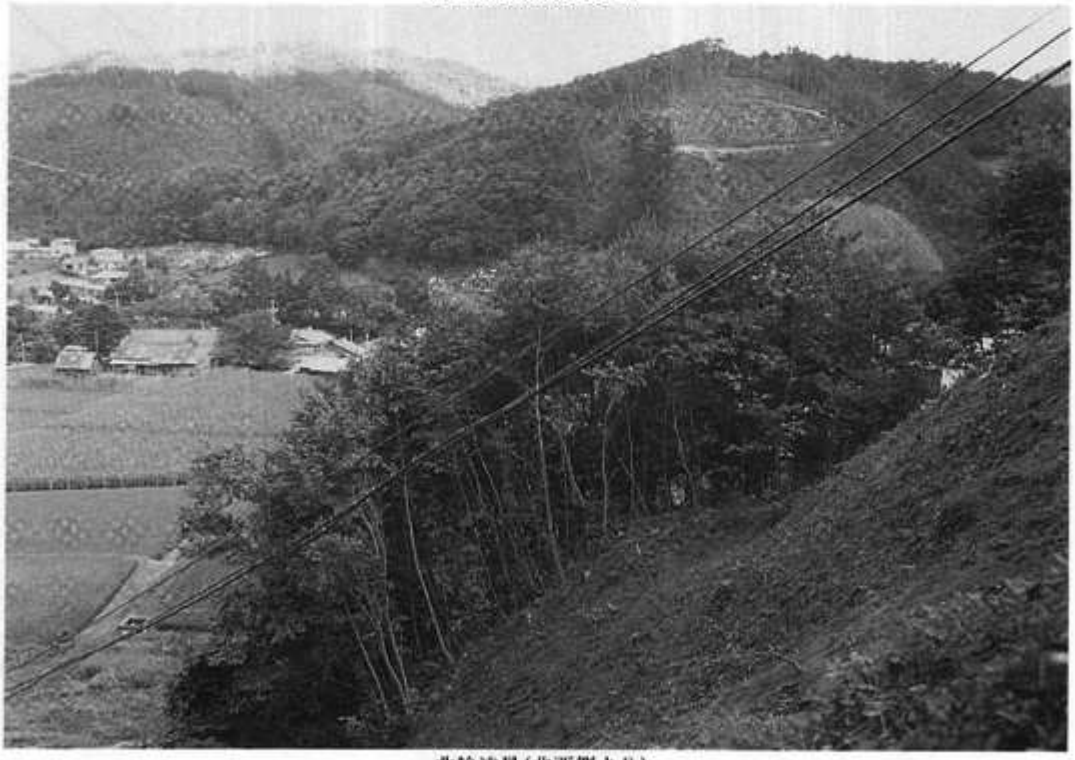
# 写真図版

調査区遠景(北西側より)

調査区遠景(西側より)

**写真図版1　調査区遠景**

調査区遠景（東側より）



曲輪遠景（北西側より）

**写真図版 2　調査区遠景**

（真上より）

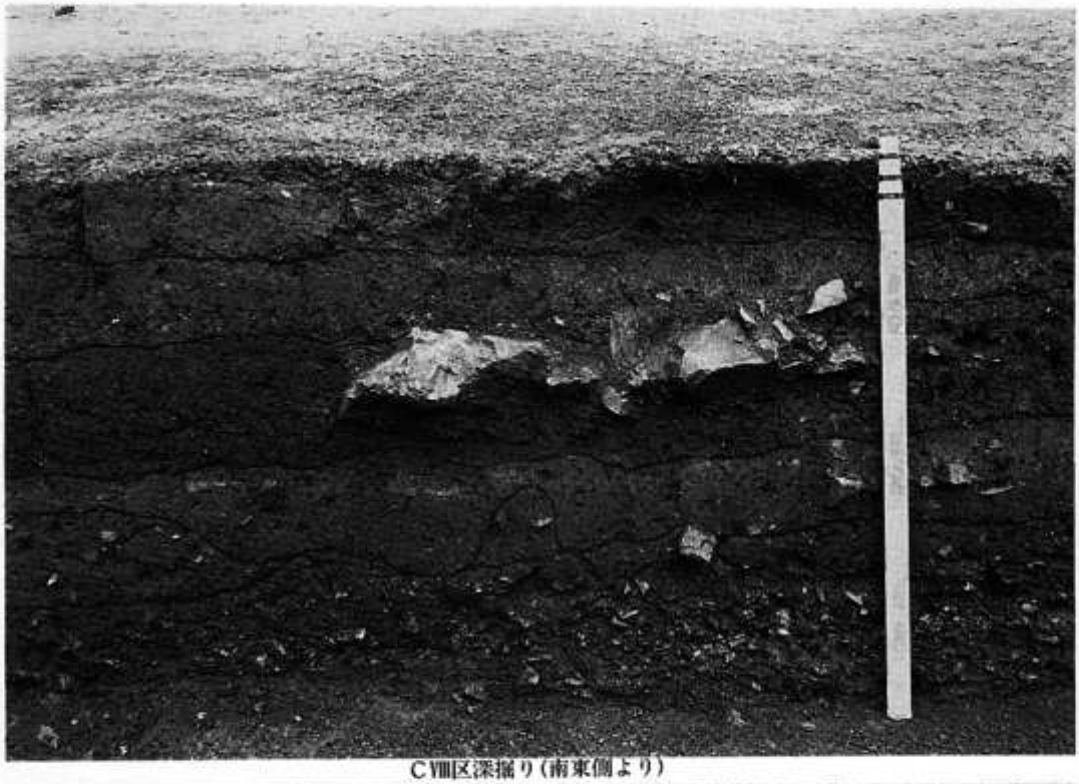
（北西より）

**写真図版 3　空中写真**

（東側より）

堀跡（東側より）

**写真図版 4　空中写真**



CⅧ区深掘り（南東側より）

CⅧ区深掘り（南東側より）

**写真図版 5　土層断面**

1号堀跡断面(東側より)

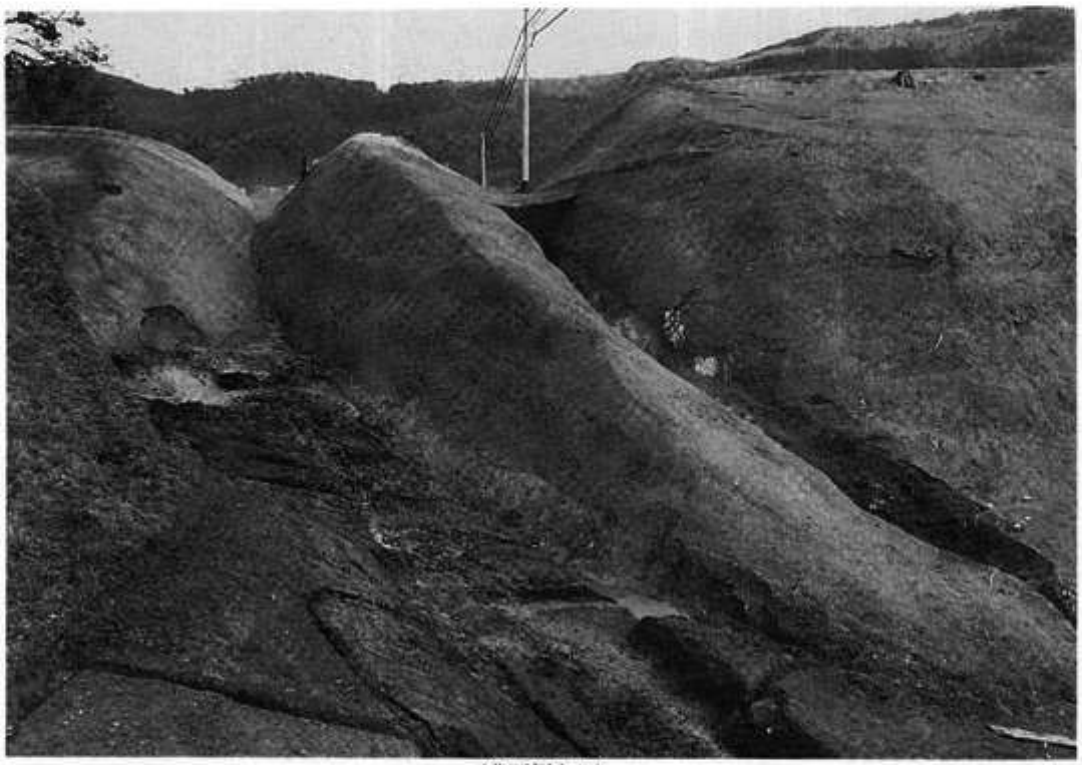
2号堀跡断面(東側より)

**写真図版 6　堀跡断面**

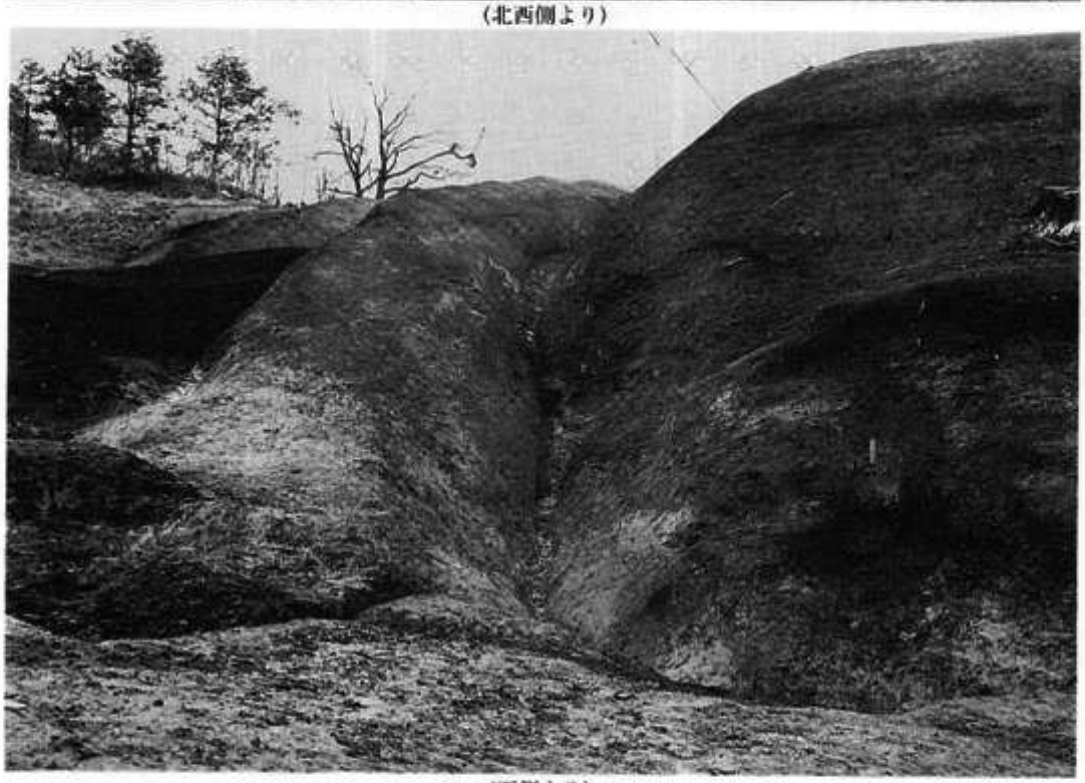
1・2号堀跡断面①(北側より)

1・2号堀跡断面②(北側より)

**写真図版7　堀跡断面**



（北西側より）



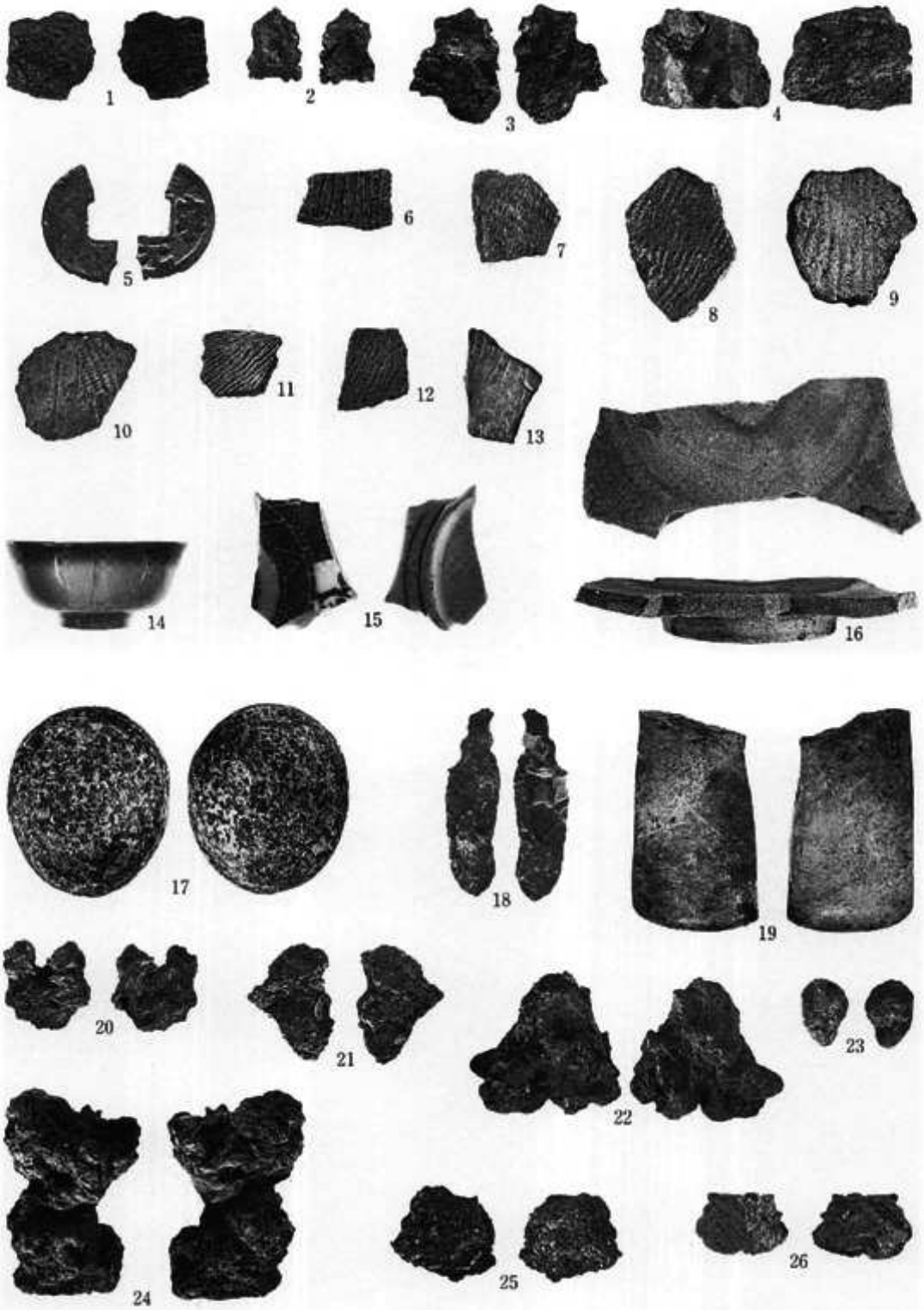
（西側より）

**写真図版 8　堀跡完掘**

堀跡・二郭完掘(北西側より)

主郭近景(北西側より)

**写真図版 9　二郭完掘・主郭近景**




写真図版10　出土遺物

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

| | |
|---|---|
| 理事兼所長 | 小笠原 喜一 |
| 副所長 | 高橋 敬明 |
| 〔管理課〕 | |
| 管理課長(兼) | 高橋 敬明 |
| 課長補佐 | 森岡 陽一 |
| 主事 | 佐藤 理 |
| 〔調査課〕 | |
| 調査課長 | 村上 康昭 |
| 課長補佐 | 鈴木 恵治 |
| 〃 | 三浦 謙一 |
| 主任専門文化財調査員 | 高橋 與右衛門 |
| 〃 | 渡辺 洋一 |
| 〃 | 藤村 敏男 |
| 〃 | 高橋 正之 |
| 〃 | 工藤 利幸 |
| 〃 | 中川 重紀 |
| 〃 | 佐々木 清文 |
| 〃 | 高橋 義介 |
| 文化財専門調査員 | 斎藤 實 |
| 〃 | 佐瀬 隆 |
| 〃 | 千葉 孝雄 |
| 〃 | 斎藤 博司 |
| 〃 | 東海林 隆幹 |
| 〃 | 佐々木 弘 |
| 〃 | 川村 均 |
| 〃 | 鈴木 貞行 |
| 〃 | 伊東 格 |
| 〃 | 斎藤 邦雄 |
| 〃 | 神 敏明 |
| 〃 | 佐々木 信一 |
| 〔資料課〕 | |
| 資料課長 | 村松 義夫 |
| 文化財専門調査員 | 高橋 一浩 |
| 嘱託 | 根橋 文一 |
| 〃 | 吉田 十次 |
| 運転技術員兼事務員 | 佐藤 春男 |
| 文化財専門調査員 | 小原 眞一 |
| 〃 | 酒井 宗孝 |
| 〃 | 鎌田 勉 |
| 〃 | 松本 建速 |
| 〃 | 笹平 克子 |
| 〃 | 花坂 政博 |
| 〃 | 佐々木 務 |
| 〃 | 金子 昭彦 |
| 〃 | 濱田 宏 |
| 〃 | 羽柴 直人 |
| 〃 | 星 雅之 |
| 〃 | 高木 晃 |
| 期限付専門調査員 | 鎌田 清造 |
| 〃 | 阿部 勝則 |
| 〃 | 千葉 悟 |
| 〃 | 熊谷 博由 |
| 〃 | 新倉 信一郎 |
| 〃 | 山口 博英 |
| 〃 | 小山内 透 |
| 〃 | 柳田 磨 |
| 〃 | 田中 元明 |
| 〃 | 菅原 敬悦 |
| 〃 | 工藤 剛司 |
| 〃 | 高橋 英樹 |
| 〃 | 溜 浩二郎 |
| 〃 | 佐藤 修一 |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書191集

# 川井館跡発掘調査報告書

## 国道281号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成5年3月25日
発行　平成5年3月31日
発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県盛岡市下飯岡11―185
TEL(0196) 38-9001・9002
印刷　株式会社　熊　谷　印　刷
〒020　岩手県盛岡市上田一丁目6―185
TEL(0196) 53-4151

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1993